VOGUE HOMMES JAPAN

VOL.6
S/S
2011 Issue
ヴォーグ オム ジャパン

ヴォーグニッポン
3月号増刊

REI KAWAKUBO GOES ASIA
川久保玲が未来を語った1時間。
なぜ今、コムデギャルソンはアジアへ?

YOHJI YAMAMOTO ♥ ANN DEMEULEMEESTER
山本耀司とアン・ドゥムルメステールがパリで再会。

ARAKI MEETS KIM HYUN JOONG
荒木経惟がキム・ヒョンジュンの美貌を「撮る」!

STEVEN KLEIN'S NEW OBSESSION
スティーヴン・クラインが魅了されたアジア男子の肉体美。

HEDI SLIMANE—WHAT'S NEXT?
エディ・スリマン、"写真偏愛歴"を語る。

EASTERN PROMISE

麗しき男子、東より来たる。

Li Wei「Fight In The Clouds 1」

WINGS OF DESIRE
現代中国のトロンプルイユ。

Interview & Text **Francesca Gavin**
Editor **Emi Kameoka**

欧米中心だったアート界に
新しい旋風を巻き起こす中国の芸術家たち。
なかでも、リー・ウェイとリュウ・ボーリンは、
己の肉体を被写体としたイリュージョンを写真に収める。
その求心力はギャラリーの枠を超え、
もはやアートが主張するプロパガンダと
いえるのではないだろうか？

中国では、何事も見た目どおりというわけにはいかない。私たちの現実感を操るパフォーマンスアーティストやフォトグラファーが次々と登場している。訴求力に満ちた彼らの作品は今や世界的なニュースとなり、ギャラリーを飛び出し、遥か遠くのオーディエンスにまで届いている。

アーティストのリー・ウェイ（李晴）とリュウ・ボーリン（刘勃麟）は、写真と自分の身体を組み合わせた作品を発表している。二人の作品は、まるで自らが監督となって、自分のイメージを演劇に仕立て上げているかのようだ。彼らはフォトグラファーであると同時に被写体でもある。こうしてセルフポートレイトの概念は興味深いものに再構築され、アーティストのアイデンティティーを見せるだけにとどまらず、政治や社会、宇宙といった、より大きな問題にまで踏み込んでいるのだ。

中国アートの注目度は、美術界に対する政府の厳しい取り締まりにもかかわらず、同国の経済成長を反映して5年前に爆発的に高まった。2006年、ニューヨークのサザビーズで中国現代アートが初めて売りに出され、1300万ドルの値をつけた。その1年後、アイ・ウェイウェイ（艾未未）やユエ・ミンジュン（岳敏君）といった中国人アーティストは、価格でも需要でも世界最高クラスの仲間入りを果たした。チャールズ・サーチなどのコレクターに至っては、中国作品だけの展覧会を開催している。香港アートフェアが年々活況を呈しているのは、中国アートの成功が重なっていることも理由の一つだ。なかでもパフォーマンスアートは最も興味を引く表現手段となっており、文化的な網をくぐり抜け、自由と実験のチャンスを広げている。

山東省のアーティストであるリュウ・ボーリンは、透明人間となって有名になった。凍りついたような自分の身体を周囲の環境に溶け込ませ、カムフラージュした写真作品である。周囲と同化するまで、自分の身体を緻密にペイントする。崩れかけた壁や落書きされた列車、あるいは中国を代表する建築物の前で目を閉じて立っているアーティストを、私たちは目を凝らして探さなくてはならない。おそろしく制作時間のかかる作品であり、1枚のショットを撮るのに10時間は要するという。その熱心さが実を結び、ボーリンは今年だけでパリ、ニューヨーク、ストックホルムの個展を控えている。

北京を拠点に活動するアーティストのリー・ウェイもまた、驚くほど複雑で手間のかかる作品を制作している。ボーリンの幽霊のような静謐さとは対照的に、ウェイの写真は実にドラマティックで危険な印象を与える。彼の身体は、超高層ビルの窓から吸い出されているかのように、あるいは風船のように空中へ漂っていくかのようで、見ているだけで目まいがする。棒のように硬直したウェイが、壁や車、地面に頭から突き刺さっている写真もある。それを観た私たちは、人間を地球上にとどめるものは何もないかのような無重力感をおぼえるのだ。

Liu Bolin「Hiding In The City No. 92- Temple Of Heaven」

LIU BOLIN

リュウ・ボーリン

1973年中国生まれ。北京中央美術学院でファイン・アーツの修士号を取得後、北京を拠点に本格的にアーティストとして活動。1998年に北京のミン・レンギャラリーで初の個展を開催。2006年にはパリのペルタン・トゥブロンギャラリーでもソロ・ショウを成功させる。その後も北京の798芸術地区で「Sculpture」など作品を次々に発表。

「No. 3 Of 10 Panels」

“自分の環境に「なぜ?」を問いかけたい。”

——自分の身体を背景に溶け込ませるカムフラージュのアイデアを思いついたきっかけは何ですか?

学校を卒業したとき、私には仕事がなく、家族も恋人もいなかった。恋人も収入もないあの4年間、自分は社会から捨てられたように感じていました。居場所がなかったんです。どこにいても自分自身は無意味な存在でした。それが感情面の理由ですが、それと同時に、政府の非道さへの抗議としてこのシリーズを制作しました。

——身体と建築物の関係についてはどう思いますか?

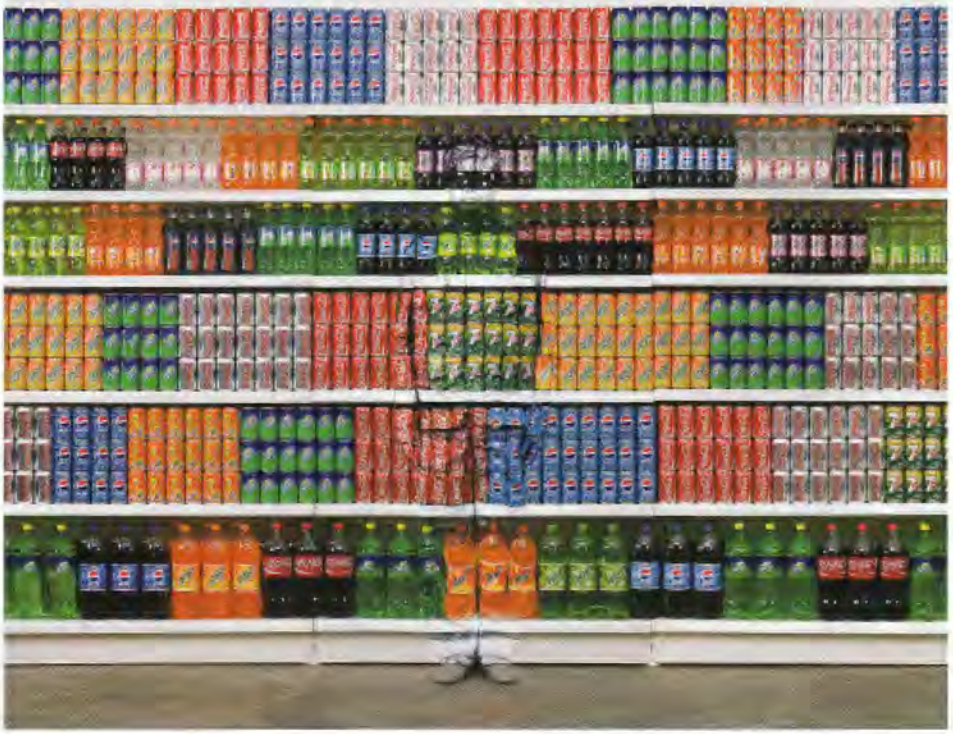
中国社会の共産主義という理想の中で、統一思想、宣佳教育(教育理念の宣伝)といったスローガンが壁に大きな文字で書かれているんですが、そこで私は自分の身体を覆う、あるいは消してしまうことを選びました。それは私と壁の関係ではなく、個人としての自分と大衆を欺こうとするあのスローガンとの関係です。私は作品を通して、自分が生活している社会のことをもっと考えようと人々に呼びかけたいと思っています。「我々の社会はどのように発展しているのか?」「我々が抱えている社会問題は何なのか?」「我々はどこに向かっているのか?」と問いかけているんです。

——撮影ロケーションはどういった観点から選んでいるのですか?

ロケーション選びは非常に重要です。中国社会の問題点を映し出せるように、われわれになじみのあるディテールを慎重に選んでいます。

——あなたの表現手段は普遍的なものではありますが、具体的に、中国人としてのアイデンティティーに対する自分の感覚と作品をどのように結びつけているのですか?

一部の人たちから、私の作品が人間と環境の関係性を巡る議論ととらえられていることは知っています。それはまさに、私が作品で表現しようとしていることです。人は環境で変わるものですし、私は自分の作品を通して「なぜ?」と問いかけたい。自分が置かれている環境はなぜこうなのか、社会主義の道を歩いていくことがなぜこれほど難しいのか、生き残るために羊として生きなければならないのはなぜなのか……。私の作品を観る人々に、こうしたことを考えてほしいのです。



「Hiding In The City No. 93- Supermarket No. 2」